

住居の教育内容における変遷の様相（第2報）

——家事教育の進展期——

Features of Transition on Teaching Contents of Housing (2)

——Household Education for Developing a Position——

吉原 崇 恵

Takae YOSHIHARA

(昭和60年10月11日受理)

This second study is concerned with the contents of Housing, in the period of Household Education being subjected to, and then being independent of, Science. The results were:

1. At the end of the Period of the Establishment of Household Education, the contents were encyclopedic and were of a fragmentary heap of knowledges. Those features became more distinct in this period.
2. Studies on Household Education were done more widely and deeply, which were chiefly focused on Critical investigation of the contents.

結 言

家庭科教育に関する歴史研究は、従来、教育制度や教育思想の視点からの成果に比べると、教育内容および教授法の研究成果は、さほど多いとはいえない。この傾向は、戦前における裁縫教育の研究に比して家事教育研究の場合に、より顕著だといえる。筆者は、家庭科教育における住居の教育内容の編成原理を求める基礎研究として、戦前、戦後を通して、家事教育および家庭科教育における住居の教育内容の変遷の様相を整理検討している¹⁾とくに、教育内容の特徴を論理性、系統性の視点から把握を試みてきた。その成果を、明治初期の家事教育から明治44年に理科家事の制度化がなされるまでを家事教育の創設期として第1報にまとめて報告した²⁾

今回は、創設期末においてみられた住居の教育内容構成上の特徴が理科家事教科書の中で定着した状況およびその後の家事教育への影響、また家事教育についての研究の状況をみることによって家事教育が制度上確立し進展していった時期の特徴を明らかにしたい。

とりあげた主な資料は、大正3年発行の高等小学理科家事教科書(教師用および児童用)、昭和8年発行の高等小学家事教科書である。この期の教科書は国定であり、この二書が全てである。そして、これらに対する当時の意見や研究の到達点を表わすものとして、全国の師範学校教諭や、家事教育の理論的指導者などの著作を用いた。

教育内容の分析は、まず目次によって構成を概観し、主に系統性の有無を検討した。その際、

単純と複雑，抽象と具体，一般と特殊などの関係に注目して分析した。算数や社会科ではすでに試みられてきたこれらの視点による分析の方法³⁾が家事教育においても有効かどうかの仮設的な検証の意味も含まれている。

結果および考察

1. 高等小学理科家事教科書

1) 教育内容の構成

明治44年に理科の一部に家事が復活して以来初めて、文部省から教科書が発行された。それは大正3年の高等小学理科家事教科書第一学年用である。次いで大正4年に第二学年用，大正6年に第三学年用が発行された。これらの教師用教科書の凡例には、「本書は理科の毎週教授3時間の中1時間を家事の教授に当つるもの」とあり、実際に教授をすすめる中で、後述するように理科との関係のあり方や、実習時間の配当さらには教材精選の提言となってあらわれることになる。住居についての内容は第一学年用にのみ設けられており、その目録を表1に示した。

表1の目録でまず気がつくことは、住居に関する教育内容の範囲が不明確なことである。教師用書の凡例では「住居並びに器具に関する教材」と一括されていて、目録のどこからどこまでがそうなのかをあらわしてはいない。明治初期の教科書の目次は、1つの節をいくつかの項で構成した型になっていた。それは、例えば、大きなまとまりとしての「住居」の節が、「住居の目的」「住所の選択」「間取り方」「住居の購入」「住居の衛生法」などという小項目で組み立てられていた。この場合は、「住居」の範囲は明示されているわけである。

表1にみる内容構成の特徴は個々の事項が並列した型になっていることが、住居の教育としても他の領域にしても範囲を不明確にすることにつながっていると思われる。このような事典的な構成では、単純と複雑，抽象と具体，一般と特殊などの関係も読みとりにくいと言えよう。

第一課に「住居」がある。この内容と他の住居および器具に関すると思われる課との関係を分析した。まず、第一課「住居」の記述は、次のとおりである。

住居は風雨寒暑を凌ぎ、家財を保護し、且一家の秩序を保つに必要なものなり。住所は職業に応じて適当なるべきは勿論、土地高燥にして水質の佳良なる所を可とす。もし然らざるときは相當の工夫をなすこと肝要なり。室の數、廣さ、並びにその配置は、家族の多少、職業の種類および生計の度によりて異なるべしと雖も、空氣の流通、日光の射入、使用の便否等を考え適宜諸室の用い方を定むべし。又戸、障子、襖等は成るべく質素に

表1 高等小学理科家事教科書 第一学年用 目録 (大正3年)

一	住居	一
二	住居の修理保存	一
三	戸締及び火の用心	二
四	掃除	二
五	石鹼洗及び灰汁洗	三
六	疊・建具の手入	四
七	木製器具の手入	四
八	金属器・陶磁器・ガラス器の手入	五
九	雑具の手入	六
十	衣服	七
十一	衣服の整理保存	七
十二	白布類の洗濯	八
十三	衣服の洗濯	九
十四	しみ抜法	〇
十五	寝具	一
十六	看病の心得	二
十七	薬用及び介抱	三
十八	病人の衣食住	四
十九	応急手当	五

して丈夫なるものを用ふべし。

ここに記された事柄を、教育内容の要素として抽出すると、住居の目的、立地条件そして間取り方があり、間取り方については、家族や職業、生計などに応じる事とともに、衛生、便利さの基準がとられている。また建具についての価値としては、質素さと丈夫さをあげている。

そしてこの課の内容は、一般的、抽象的な記述であること、総括的であることからして、これらの規定が他の課においてどのように展開されるのかを分析する。

第四課

室内を掃除するには先づ戸、障子、襖を開放して、はたきにてよく室内の塵を拂ひ、成るべく畳の目に沿ひて静かに掃き寄せ、塵取にて取去るべし。かくして後、固く搾りたる雑布にて先づ柱を拭き、次に敷居、縁側等を拭くべし。床の間、棚等は乾きたる布にて拭くを可とす。門前及び庭は毎朝早く掃除すべし。又下水及び雨水を排水すべき溝・土管は落葉、塵芥等にて塞がることなきやう注意すべし。

以上のように「掃除」の課の記述は、各個所別に「掃除のしかた」だけを内容としており、とくに、掃除の必要性とその根拠に相当する内容が皆無である。掃除の必要性とその根拠に相当するような内容がもしも設けられているとするならば、それによって、ここにある「掃除のしかた」と第一課の「住居」の内容を関係づけることができよう。すなわち、衛生や便利、質素や丈夫さという「価値」の実現を、さらには「住居の目的」を充たすためのひとつの具体化という形で、記述内容の展開がみられるはずである。そこには「住居」の課を一般的・抽象的なものとして対照し、「掃除」の課を個別化、具体化したものとする系統的内容を構成することができよう。しかし、実際の記述のあり様は、各々の課だけで独立完結する構成だと言わざる

表2 理科家事教科書に対する意見の概況

具体例は資料参照

1	主に教科論にかかわること	① 実用重視 ② 科学性重視 ③ その他
2	主に内容にかかわること	① 附加事項 ② 削除事項 ③ 合併事項
3	主に方法にかかわること	① 排列・配当 ② 土地の事情 ③ 理科・他科との連絡 ④ 図解・挿画

を得ないものである。このような傾向は、「住居の修理保存」の課、「畳、建具の手入」の課においても同様である。また教師用書で、教授事項や注意、備考の事項⁴⁾をみると、より詳細に、薬品を用いたり、理科知識を応用することによって「手入法」の合理化を意図していることがわかる。この点では家事教育の創設期よりも発展したとも考えられる。しかし、他方では、前述のように課ごとに独立完結型の内容構成になっており、系統性のない、事典的知識の羅列といわざるを得ない。家事教育の創設期末

にみられた傾向⁵⁾が国定教科書の上に定着したものといえよう。

2) 国定教科書意見報告彙纂⁶⁾

本書は大正5年と7年に、文部省図書局から発行されたものである。全国の師範学校から提出された、国定各科教科書についての意見報告を編集したものである。この中から家事教科書について提出された意見を通覧し、分類したものが表2である。さらに、分類した項目に該当する代表的意見を選んで資料に示した。

表2に示した意見分類は、師範学校関係者の理科家事教育を実践する立場での積極的な問題関心、研究課題だと考えることができる。そこでは、家事教育の目標・内容・方法など教育課

程全般にわたって問題関心があることを示している。

とくに注目されるのは、理科との関係についての多様な意見である。それらは、家事教材は、理科知識の応用または活用であり、理科と家事教育は区別せず、極端な場合には、家計簿記のような「理科ト関係ナキ教材ハコレヲ省キテ他ノ教科書ニ譲ルコト」⁷⁾とまで考えられている。いずれにしても、理科との連絡に留意することが言われているが、このことは実習に重きを置くという教授法にもつながっている。

実習に重きを置くという場合に、一面では、明治期の注入主義的教育方法を克服する志向をもっているが、そのような認識論的価値よりも、多くは「実際の」という意味で価値がおかれている。そのために教材は成るべく卑近の教材を選び⁸⁾記述は抽象的記述をさけて⁹⁾教材の排列には季節と関係をさせて¹⁰⁾また「実習ノ必要ヲ感ズル卒業当時ニ」¹¹⁾となるのである。実習時間は多くを要し、しかし住居の掃除等の実習は衣類の洗濯の実習に比べて多くの時間を要しないし、「日々実習セシメツツアルモノナレバ」教科書からは省きたい¹²⁾となるのである。他方では、際限なく事項を附加する旨の要請も出されるのである¹³⁾

このように実習重視の精神は、「実用的ノ意味ニ於テ重大ナル価値ヲ有スルコトナラン」のであって「知識ヲ興ヘ理論ノ證明トナスヲ目的トスルガ如キ実習ヨリハ時間ヲ多く要スルコト」¹⁴⁾になり時間が多くとれないならば教材を減少することを考えるとも言われている。以上の考え方は実習授業という教育方法を重視する立場から教育内容を構想したり、実習で取り扱う教育内容を実用性を最優先する立場から構想している。

しかしながら、いますこし異なる考え方がみられる。それは、東京府豊島師範学校から出された意見である。

教材ヲ普通ノ家庭ニ於ケル日常生活ノ事実ニ求メ、極メテ平易ナルモノヲ採用シタル
點ハ最モ其ノ要ヲ得タルモノナルベシ。平易ナル習慣的事実ヲ単ニ排列シ記述スルノ
ミニテハ動モスレバ教科書ニ深ミナクシテ其ノ価値ト權威トヲ損スルコト少カラズ
(中略) 日常卑近ノ習慣的事実ニモ科学的理法ノ潜ムコトヲ知ラシメ、探求考察、日
常生活ニモ十分改良ノ余地アルコトヲ知ラシメ、其ノ発奮努勉ヲ促スニ足ル様ナル記
述ノ方法ヲトラザル可ラズ

この意見は、教材の価値について前述した実用のみ最優先という考え方と同じではないと思われる。もちろん実用につながる発想は見うけられ、その平易さにおいて価値をおいてはいるが、そこに留ることの問題点を提起している。そして現実の日常生活と科学的な理を照合することを重視し、その上にたって探求し、日常生活の改良に向い、発奮できる人格の養成を主張している。同様の主旨で、「家事科ノ意義ヲ知ラシメ将来ニ於ケル研究的精神養成ニ資スル内容」が必要だとの意見もある¹⁵⁾

これらは、実用という教育価値を出発点とし、そこに立ちかえる教育目標をもっているのだが、科学的、探求的、研究的精神を重視している点で実用一点張りの実用主義的考え方とは異なるといえよう。それは、今日にいうところの「教育と科学の結合」という教授学的原則につながる理念の萌芽だと理解できよう。

また、鹿児島県師範学校の意見にあるように、教授を、「易ヨリ難ニ及ボシ、児童ノ心理ニ適セルガ如シ」、他教科との重複を避け密接な関連を持たせる必要を説く例も多い。児童の心理に適った教授を求めることと関連して、詳ラカニ、具体的ニ、自由ニ、教授する方途を探っている。それらは、図解や挿画を用いること、土地や地方の事情に応じる説明がなされることなど

である。すなわち、児童の学習心理を重んじる立場から、易から難への指導、重複を避ける教育内容の精選、個別具体化の展開、視覚を利用する直観性の原理など、指導、教授における系統性の考え方をうかがうことができる。

以上のことから、理科家事時代の教育課程の考え方を、大きく2つの思潮としてまとめることができる。ひとつには理科的知識の応用を含めて、実用性を最重視した実用主義的考え方であり、これが時代の主流をなすものと思われる。これに対して、他のひとつは、「教育と科学の結合」につながる考え方、指導の系統性を追究しようとする考え方などの萌芽である。

2. 高等小学家事教科書

1) 教育内容の構成

大正8年2月に小学校令が改正され、同年3月の小学校令施行規則中改正で家事科が理科から独立し、制度上の確立をみた。そこでは教科としての目的、内容等の要旨が明らかにされ大正15年には小学校令改正によって家事科は裁縫科とともに女子の必修教科となった。

これらの改正に先だって、寺内内閣の時設けられた臨時教育会議は「教育ニ関シ改善スベキモノナキカ、若シ有リトセバ、其ノ要点及方法如何」という諮問に対し大正7年10月に次のような答申を出した。すなわち

一、女子ニ於テハ、教育ニ関スル勅語ノ要旨ヲ十分ニ体得セシメ、殊ニ国体ノ觀念ヲ鞏固ニシ、淑徳節操ヲ重ニスルノ精神ヲ涵養シ、一層体育ヲ励ミ、勤勞ヲ尚フノ氣風ヲ振作シ、虚榮ヲ戒メ奢侈ヲ慎ミ、以テ我家族制度ニ適スルノ素養ヲ与フルニ主力ヲ注グ事。

二、高等女学校ニ於テハ、實際生活ニ適切ナル知識ニ家事ノ基礎タルベキ理科ノ教授ニ一層重キヲオク事。

表3 高等小学家事教科書
第一学年用 目録 (昭和8年)

第十五課	燃料	三三	第十六課	畳・建具とその手入れ	三五
第十四課	火鉢・ストーブ等	二八	第十七課	什器・履物等の手入れ	三八
第十三課	電燈	二五	第十八課	料理用具	四一
第十二課	井戸と水道	二三	第十九課	食物とふきん	四九
第十一課	住宅	一八	第二十課	食物の成分	五〇
第十課	人造絹絲織物	一七	第二十一課	米と米飯	五四
第九課	麻織物	一六	第二十二課	麦と麦飯	五六
第八課	木綿物の洗濯	一五	第二十三課	味噌汁	五七
第七課	単衣の全洗	一四	第二十四課	煮汁	五九
第六課	しみ抜き	一二	第二十五課	澄汁	六〇
第五課	白木綿の漂白	一一	第二十六課	するとん	六二
第四課	木綿織物	八	第二十七課	鶏卵とゆでたまご	六三
第三課	織維と織物	六	第二十八課	いりたまご	六四
第二課	掃除	一	第二十九課	煮魚	六四
第一課	女子と家事	一	第三十課	焼魚	六六

というものであった。

これは、基本的には家族国家観に基づき家父長制家族制度の維持の精神と、節約や理科の思想に基づいた実用的な家事能力の育成をめざしているものである。ここで打ち出された家事教育観は、前に述べた理科家事時代における2つの思潮のうち、実用主義的考え方の方がひき続いて主流になったことを示している。そして、科学性を重視した家事教育の提案は、理科にのみ基礎をおくことを強調した型に矮小化され矛盾をはらむこととなった。

昭和8年、ようやく家事教科書が発行された。その目録を表3に示した。

目録を通覧して気がつくのは、「住居」という用語ではなく「住宅」と表示されていること、井戸と水道、火鉢・ストーブ、燃料などの課が新設されている。それは住宅設備の水、光、熱などの細部についての内容である。住居と住宅という用語について規定や使い分けがなされていないとは思えないが、住居を物的存在としてとらえる傾向が強

まったと考えることもできる。掃除や器具・什器の手入についても同様で、実用的・事典的な様相をもっている点では理科家事教科書の傾向を引き継いでいると思われる。しかし、第一課「女子と家事」¹⁶⁾が設けられたことが注目に値する。ひとつには、前述した師範学校による意見に添えてもおり、また臨時教育会議の答申の主旨が貫ぬかれているわけである。家事科を学ぶ者の認識は、女子が家事のいろいろを勤めることが、国家の盛衰にかかわる国家的意義をもつものであるという家事観、女性観に総合されるものと推測される。

第十一課「住宅」では、冒頭に「一般に望ましい点」として、衛生的であること、そのために日当たり、風通しがよく、寒暑を避け、清潔を保ち易いなどの条件をあげている。第2に、用心がよく堅牢、安全であること、第3に、便利であることが述べられている。ここでは、一般的抽象的記述であるが、続いて台所、便所、庭園を対象にして例えば、便利さの具体化として動線理論が導入されるなど、内容の構造には一般的・抽象的条件を個別的空間において具体的に展開する型をみることができる。

ここでは二階建住宅建築設計図¹⁷⁾があり、建図、二階平面並一階屋根伏図、一階平面図がそれぞれあり、住宅間取図符号も紹介されている。このような内容は、明治初期以来の教科書の中では極めて珍しく、筆者の調査したところでは全く新しい材料だと思われる。しかしながら、せつかくの具体的で詳細な資料ではあるが、この図を用いて、何を教授し、学習すべきかは記述されておらず、住宅の各空間や間取りの解説もないのである。

大正期の理科家事教科書に対する意見の中で、挿画の意見があり、それを受けいれていると思われるのだが、何を教えるための資料なのか不明であり挿画と記述内容の間に不整合があるといえよう。

住宅の空間の中で、とりあげられているのは前述したように台所、便所、庭園であって、衛生的であること、安全であること、便利であることなどを具体化してある。それは、例をあげると、竈に煙突をつけ、燃えやすくすることであったり、庭園利用に実用性を見出すことだったりするのである。確かにそれらの方法は、労力や資源の節約につながることであって、合理的な生活の方向を示している。すでに大正期の住宅改善運動の中で勧められたことがらである。ここで問題にしたいことは、当時の家父長制家族制度の下での家族関係について科学的精神に基づいた合理性の是非を問わずに大前提の肯定事項になっている点である。

能率や便利さの追究によって生活を合理的に改良していく積極的な内容をもってはいるものの、他面では、女子が家事に専念することが国家的に意義あることとして、家族制度の温存、秩序化に貢献するという部分的な生活合理化の内容であるといえよう。

第二課「掃除」は、まず、汚れた住居は不愉快であるばかりでなく、衛生上にも保存上にも甚だよくない。掃除の仕方にはいろいろある、と掃除の必要性を一般的に述べてあるものの以下全ては掃除の方法で占められている。はたき掃除、掃き掃除、洗い掃除という方法とその際に用いる道具の扱い方が教育内容である。風向きや湿り気の利用など細かい、実際的な方法が記されており¹⁸⁾「実用書」の観さえある。

掃除道具の外観図に1ページをさいてあり、精確ではあるがぜひとも必要な挿画とは考えられないのである。

この課の内容構成の特徴は、理科家事教科書と同じく実用主義的な事典的事項の羅列した型であって、個々の掃除の方法に終始する独立完結型になっている。

以上、昭和8年の家事教科書にみる住居の教育内容は、理科家事時代の主な思潮をいっそう

きわだたせて、科学性の尊重は、理科的範囲に限られていたといえよう。他方、科学性が適用されないところで、国家主義的家族観、女性観に収斂する家事教育の性格が顕著になった。

2) 家事教育研究の状況

昭和2年4月1日に、東京で月刊雑誌『家事及裁縫』¹⁹⁾が発刊された。その発刊の辞をみると、当時の家事教育研究の視点をうかがうことが出来る。それらは、「将来社会状態が進歩し、女子の地位が伸展するにつれて愈々益々生活問題の研究が促進されてくる」「家事及裁縫の両科は、女子教科に於ける凡ての教科を洗練綜合することが出来る」「我が『家事及裁縫』は醇美なる家庭生活の建設、活躍せる学校教育の完成を期するために適切有益なる理論と實際を紹介し、昭和の時代に於ける女子教育に向って、一層の努力を捧ぐべく（後略）」とある。すなわち、生活問題研究の必要性や女子教育、教育研究の交流の必要性が謳われており、関係者にとっては、衆知を集める場が提供され享受できることになった。本論では、発刊の事実をもって、前時代と画する積極的評価をもたせるが、真の歴史的評価は別の機会にゆずりたい。

ところで大正期から昭和初期頃の家事教育は、未だ読本的、暗記物的扱いでなされていたと思われる。昭和12年に、『家事及裁縫』の発刊10周年記念号にある回顧録で、当時の状況をうかがい識ることができる。

『いぼた蠟』これは或る女学校の家事科教師に奉ったニックネームである。その由来が面白い。即ち家具の手入の時間に『先生、塗机を綺麗にするにはどうしたらよろしうございますか』『いぼた蠟で手入をします』『それでは長火鉢は』『いぼた蠟で』（中略）然し生徒達はその『いぼた蠟』がどんなものであるか知らなかったと云ふ。読本的家事の実例を比處に見ることが出来る²⁰⁾

しかしまた、この時期は新しい家事教育の提案や理論化がなされて、それを歓迎する土壌が熟していたとも思われる。たとえば、

教科書の書き振りも（中略）よく云えば『實際的』とか『日常生活に即した』とかいふことが出来よう。注入的に教えて練習させようとするのが主眼であった。石澤先生の家事新教科書の出現は科学的工夫創造力の啓培といふことを渴望してゐたものには旱天の慈雨の感があった²¹⁾

と述べ、続いて、井上氏、近藤氏の著書が出されて「家事教育上の革新期であったやうだ」と回顧されている。

先行研究では、新福氏が、吉村千鶴、石澤吉麿、近藤耕蔵らが著わした高等女学校用書を分析した。そこでは、主に住居の教育内容と現実生活の変化の対応を分析してあった²²⁾ここでは、高等小学校の家事教育理論の指導的立場にあった、東京女高師附属小学校関係者の著書を検討した。それは、高等女学校用書ではみえにくいと思われる児童観や児童の生活のとらえ方をみることができること、さらに、これらの点と家事教育、住居の教育との関係のとらえ方などを読むことができるからである。

戸澤イマは、家事教育の目的、内容、方法上の問題を児童の側に立って指摘している²³⁾

児童は他山の月を眺むる調子にて、児童自身の家庭にあてはめて、実地に練習し、改良を加えて行くといふやふな気持は少しも起らない。

その理由は、たとえば、住居を定むるにつき、場所の選定につき、条件を列挙するのみであつて、如何なる土地が衛生上危険が多いか、如何にせば衛生上危険なき土地となるか、などの具体的事項について研究させない様な教授態度だからだという。そのような教授によって児童は

なるほど家はあるところに建てると宜しいのだな。併し私の家は貧乏で、そんな條件の適ったところはない。どうせ私の家なんか、学校で習った通りには行かないのだから、まあ六ヶ條だけ覚えてれば、試験の答えは出来る

という心理になると分析している。さらに教材選択上の問題として、家庭に任せ得べき事項、他教科にゆづり得べきものを編入していること、土地の状況に不相当であることを指摘した。

これらの主張は、1980年代の現代においても留意されるべき教育課程の重要事項である。とくに、児童の学習心理や生活実感を重視した立場から「児童・生徒を研究者の立場に立たしめて」とまでいわせる教育観は、大正期の児童中心主義の発展と理解することができよう。また、家庭での教育や他教科教育との相対的な独自性への問題関心も家事教育の理論的確立にとって必須の要件であると考えられる。

同じく東京女高師教授で附属小学校校長だった堀七蔵は、「家事を処理する方法を単に実習せしむるのみでなく、その方法のよって来る原理をよく理解せしめ、原理に基づく方法をよく理解してその技に熟するやう指導せねばならぬ」と主張した²⁴⁾

大正期の理科家事教科書に対する意見書で、実用主義に陥る実習重視がみられたが、堀七蔵の場合は、家事を処理する方法的技と原理とを結合させることを重視している。それは教育内容においても教育の方法上においても、いわゆる実践と理論の統一といわれる教授学的原則につながるものである。この教授学的原則は、戦後（1950年代以降）の教育論争（経験主義教育、問題解決学習などの論争）の成果のひとつであることを思えば、堀七蔵の主張は、先駆的なものだったといえよう。

戸澤、堀の児童観や教授論は新福論文では分析の対象ではなかったものである。ここでわかったことは、戸澤、堀の考え方には大正期に発展した自由主義、児童中心主義、また自然科学の発展などを背景にした科学的精神を基にして、いわゆる子どもと科学を結びつけるところの考え方である。それは、今日でいうところの「教育と科学の結合」につながる考え方の系譜に位置づくものであろう。

結 語

① 国定教科書である理科家事教科書の内容構成は、家事教育の創設期末にみられた傾向が定着していた。住居の教育内容は、住居についての概念形成への収斂されるような系統的な内容構成ではなく、実用的な事典的知識が量的に拡大していく羅列された型である。

理科的知識の応用や活用によって生活改良の精神を養成するという教育観と、家族制度を維持するための教育観は矛盾する側面をもつにもかかわらず、女子が家事を合理的に遂行することは、国家的に意義あることだとする家事教育観に統合されて、家事教科書（昭和8年発行）に明示された。

理科的であることは、実習重視の思潮となって、児童の学習心理を尊重する思想と相俟って、より实际的、具体的な家事教育のあり方が求められた。家事教科書（昭和8年）には詳細な挿画が多く採用されたところなどに反映されている。住居の教育内容は、掃除や修理保存、手入れ法などに限られており、原理や根拠について追究するものではなかった。

② 家事教育についての雑誌、研究書が発刊されたことによって実践研究の全国的な交流の場がひらかれた。研究書は当時の家事教育に対する問題提起から出発しているものであった。すなわち、家事教育の主流となる思潮が実用主義的なものであるのに対して、児童の心理と

科学を結びつける考え方や、実習と理論を結びつける考え方があった。これらは、後世の教授学的原則の系譜を形づくる底流であったとも考えることができる。

③ 家事教育が制度上確立し、実践、研究上、進展の時期だといえよう。

注および引用文献

- 1) 拙稿「家庭科教育の内容研究—住居概念の変遷—」静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）第11号，昭和55年3月，pp.91～103
 拙稿「家庭科教育の内容研究—統・住居概念の変遷—」静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）第12号，昭和56年3月，pp.211～221
 拙稿「教科書教材の分析—住領域の傾向と課題」『生活課題と教育』光生館，昭和59年6月，pp.166～180
- 2) 拙稿「住居の教育内容における変遷の様相（第1報）—家事教育の創設期—」日本家庭科教育学会誌第22巻第2号，昭和54年11月，pp.144～150
- 3) 柴田義松『授業の基礎理論』明治図書，1971，pp.95～104
- 4) 文部省 高等小学理科家事教科書第一学年教師用，「四．掃除」のうち「注意：本課の教授には手拭，前掛，襪，はたき，箒，塵取，雑布，樋等を用意し適宜実習をなさしむべし。備考．箒の汚れたるときは石鹼水にて洗ひ水にて濯ぎたる後之を吊して乾すべし。便所の樋箱，朝顔に固く附きたる汚物は硫酸又は鹽酸の稀薄なる溶液を用ひて擦落せば容易く取去るを得，但し酸類はたたきを侵すものなれば，これを落とすことなきやう注意すべし。又，金属を侵すものなれば，之を容るには金盥，バケツ等の金属器を用ふべからず。
- 5) 前掲書2)に同じ
- 6) 文部省編 大正5年，7年発行のもの。教科別，地方別に編まれている。
 以下7)～15)は，国定教科書意見報告彙纂から。意見提出元の師範学校名。
- 7) 大阪府天王寺師範学校
- 8) 大阪府女子師範学校
- 9) 香川県女子師範学校 鹿児島県師範学校
- 10) 京都府女子師範学校 香川県女子師範学校 長崎県女子師範学校
- 11) 前掲7)に同じ
- 12) 福岡県女子師範学校
- 13) 東京府青山師範学校 福島県師範学校
- 14) 石川県女子師範学校
- 15) 茨城県師範学校 福岡県小倉師範学校
- 16) 第一課「女子と家事」の記述
 衣服・食物・住居に關するいろいろの事から，子女の養育、病人の看護，家計の處理等に至るまで，女子が娘とし，妻とし，母として，引受けて爲すべき家庭内の務は甚だ多い。其の勤め振りのよしあしは，直ちに一家の幸不幸に關係し，ひいては一國の盛衰にも響くものである。
 されば，それ等の務を完全に果すには如何にするのが最もよいか，家事科は此の事について調べる學科である。
- 17) 一階平面図をみると中廊下型の都市型中流住宅である。女中室もある。

18) 第二課「掃除」の記述から掃き掃除の部分

箒は、もろこし・棕櫚・竹の枝・箒草等の材料で作られる。箒で室内を掃く事は、大きなごみに對して有効であるが、舞立ち易い細かいごみに對しては、はたき掃除と同じ缺點があるから、やはり風向を利用して行ふがよい。風向の悪い場合には、戸障子をしめて行ふ事もあるが、掃き終ったならば暫時開放するがよい。

又場合によっては、茶殻・もみ殻・鋸屑等に適度の湿りを與へたものをわざわざ撒いて、然る後に掃く事もよい（後略）

19) 現『家庭科教育』の前身ともいえる。出版社は『家事及裁縫』社で現、家政教育社

20) 渡辺君子（東京）「思い出ばなし」『家事及裁縫』発刊 10 周年記念号 家事及裁縫社 昭和 12 年

21) 倭の野守（三重）「家事科 10 年前の回顧」前掲書 20）と同じ

22) 新福祐子「家庭科教育における指導内容の歴史的考察（第 2 報）——大正・昭和戦前における住居の領域——大阪教育大学紀要第 25 巻第 V 部 No. 2 昭和 51 年（1976）

23) 戸澤イマ『家事教授の実際的新主張』モナス藏版 昭和 3 年

24) 堀七蔵『研究自在家事実験室』中交館 大正 15 年

資料 国定教科書意見報告彙纂から作成—意見の例—

1. 主に教科論にかかわること

① 実用重視の考え方 成ル可ク卑近ノ教材ヲ選ビ特ニ実習ニ重キヲ置クベキ必要ヲ認メ（大阪府女子師範学校） 教材ハ一般ニ時間ノ割合ニ其量過多ノ感アリ、實際的即チ実用的ノ意味ニ於テ重大ナル価値ヲ有スルコトナラン而シテ之ガタメニハ実習ニ重ヲ置カザルベカラズカクスレバ従来ノ唯知識ヲ與ヘ理論ノ證明トナスラ目的トスルガ如キ実習ヨリハ時間ヲ多ク要スルハ論ヲ俟タズ而シテ時間ノ増加ハ不可能ノ事トセバ勢教材ノ減少ヲ必要トスベシ（石川県女子師範学校） 抽象的記述ヲサケテ實際的ニ記サレタシ（香川県女子師範学校） 各課ノ記述理論ニ走セタルガ如シ故ニ實際的ニ記述シ実習ノ便ニ供シ挿画等ヲモ加ヘ具体化サレタシ（鹿児島県師範学校）

② 科学性重視の考え方 家事教科書ハ教材ヲ普通ノ家庭ニ於ケル日常生活ノ事実ニ求メ、極メテ平易ナルモノヲ採用シタル點ハ最モ其ノ要ヲ得タルモノナルベシ、然レドモ斯ル平易ナル習慣的事実ヲ単ニ排列シ記述スルノミニテハ、動モスレバ教科書ニ深ミナクシテ、其ノ価値ト權威トヲ損スルコト少カラズ、真ニ有効ナル教科書トシテハ常ニ道具及ビ材料ノ取扱等ニツキテノ要領即チ俗ニ言フ「こつ」ヲ教ヘ、又ハ日常卑近ノ習慣的事実ニモ科学的理法ノ潜ムコトヲ知ラシメ、之ヲ探求考察スレバ、日常生活ニモ十分改良ノ餘地アルコトヲ知ラシメテ、其ノ発奮努力ヲ促スニ足ル様ナル記述ノ方法ヲトラザル可ラズ、（東京府豊島師範学校） 教師用教科書ニ於テハ成ルベク事実ノ原理ヲ記載シテ教授ノ参考ニ資セラレタシ（千葉県師範学校）

③ その他 内容ヲ教師用程度ニ詳記シ児童卒業後モ参考シ得ルモノヲラシメラレタキコト、読本ニ出デザル文字多ク読方困難ナレバ成ル可ク多ク振仮名ヲ附シ且ツ文章モ平易ナラシメラレタキコト（茨城県師範学校）

2. 主に内容にかかわること

① 附加されたい事項 第一課ニ女子ト家事ノ項目ヲ増加シテ以テ家事研究ノ立場ナラシムルコト（福岡県小倉師範学校） 教科書ノ初メニ第二学年用書ノ終リノ課ト対照シテ家事科ノ意義必要ヲ知ラシメ将来ニ於ケル研究的精神養成ニ資スルー課ヲ加ヘラレタキコト（茨城県師

範学校) 第一課「住居」ノ項ニ住居ノ衛生トシテ採光, 採暖, 換気ノ方法及ビ注意ヲ加ヘタシ尚室内ノ整理, 装飾ノ方法及ビ注意ヲ加ヘタシ。第二課「住居の修理保存」ノ項ニ「庭園, 盆栽等ノ手入」トイフ事項ヲ加ヘタシ (東京府青山師範学校) 第三課「戸締及び火の用心」ノ課ニ於テ火災, 地震ノ場合ノ外水害時ノ心得ヲモ説カレタシ (理由) 水害ハ年々全国各地ニ亘リテ之ヲ見而カモ其度数地震ノソレヨリモ多キガ故ナリ 第四課「掃除」ノ仕方中特ニ大掃除ノ場合ノ注意ヲモ加ヘラレタシ (福島師範学校)

② 削除されたい事項 理科ニ関係ナキ教材ハコレヲ省キテ他ノ教科書ニ譲ルコト (例 家計簿記) イ。第一課 住居(1)住居の目的 (2)住所, ロ。第二課 住居の修理保存 (1)屋外の注意 (大阪府天王寺師範学校) 第四課 掃除 本課ハ兒童ヲシテ日々実習セシメツツアルモノナレバ。

③ 合併されたい事項

(略)

3. 主に方法にかかわること

① 排列・配当 実習教材ハ特ニ季節トノ関係ヲ重ゼラレタシ, 例ヘバ障子ノ手入 (京都府女子師範学校) 実習時間ヲ多クシテ其徹底ヲ図ルベキモノハナルベク早く授ケタシ。兒童ノ程度ヲ顧慮スベキコト (栃木県師範学校) 実習ハ二時間以上連続シテ行フニアラサレバ, 其ノ価値ヲ發揮スルコト難キモノト認ム, 殊ニ家事ノ研究ニ興味ヲ有シ, 実習ノ必要ヲ感ズル卒業当時ニ家事教材ヲ配列スル時ハ教授ノ結果ハ更ニ有効ナルベシ

② 土地ノ事情 殊ニ家事ノ方法ニ関スル記事ガ土地ノ事情ニヨリテ自由ニ具体的説明ヲナシ得ルヤウニ記サレタルハ地方的事情ニ適応セシムベキ本科ノ教科書トシテ最モ適当ナリト認ム (石川県師範学校) 兒童用書第一課住居ノ選擇ニ関スル事項ヲ今少シ詳カニセラレタシ。都会ニ於ケル家屋選擇ノ必要ハ云フマデモナシ都邑ノ何レヲ問ハズ土地ノ状況ニ応ジ教授者ニ於テ斟酌ダニナサバ必要ナキガ如シ併シ田舎トシテモ必要ナキニハアラズ祖先伝来ノ家屋ト雖モ其ノ保存ヲ図ルニハ家屋選擇上ノ諸注意ヲ心得常ニ其ノ修理ヲ怠ラザル様力メザルベカラズ (長崎県女子師範学校)

③ 理科・他科との連絡 理科トノ連絡ハ留意サレタシ (埼玉県女子師範学校, 鹿児島県女子師範学校) 教師用書ニ於テ理科トノ連絡関係ヲ記載シ家事ニ於ル理科ノ応用方面ヲ一層明ラカニセラレタシ。教師用書ニ於テ他教科ニテ学ビシ家事的材料ヲ調査シ参考トナルベキ様記載サレタシ。家事ノ範囲ハ廣大ニシテ各学科ヲ含メリ故ニ各教科ニ於ケル家事的材料ヲ調査シ連絡アル事項ニハ其関係ヲ記載シ教授上参考ニ資スル必要ヲ認ムルガ故ナリ (徳島県女子師範学校)

④ 図解・挿画 挿絵ヲ多クシ且記載ヲ具体的ニ (千葉県, 香川県女子, 佐賀県, 各師範学校) 第四課「掃除」室内装飾ノ一部 (床ノ飾り方等), 第六課「建具」戸及襖ノ種類 (栃木県女子師範学校) 間取・台所ノ設備 (京都府女子, 大阪府天王寺, 各師範学校) 住居ノ図, 戸締ノ参考図, 台所参考図, 玄関設備ノ一例 (大阪府天王寺, 香川県女子師範学校) 家屋及居室ノ構造設備, 障子ノ張り方 (長崎県女子師範学校) 室内ノ設備 (福岡県小倉) など

参考文献

常見育男 『家庭科教育史増補版』 光生館 1976年

坂本智恵子 「戦前の家事・裁縫科教育」『現代家庭科研究序説』 明治図書 1972